

〈資料紹介〉 保幼小接続を視座とした保育内容「表現」における音楽教材

—大正期から昭和初期の『京阪神聯合保育会雑誌』における「遊戯」の音楽分析—

松園聡美

Reference Materials

Music Teaching Materials in the Childcare Content of “Expression” from the Perspective of Connecting Kindergartens and Nursery Schools to Elementary Schools : The Music Analysis of “Play” in “*Keihanshin Union Kindergarten Magazine*” from the Taisho Era and the Early Showa Era

Satomi Matsuzono

I. はじめに

平成30年度から施行された幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領においては、幼児が遊びのなかで「主体的・対話的で深い学び」を育める環境づくりが強く求められることとなり、それに伴い、保育者による援助のあり方や環境づくりがあらためて強く問われることとなった。また、幼稚園教育において育みたい資質、能力と共に、保育において目指す方向性として「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示され、そのうち、領域「表現」と密接に関わる「豊かな感性と表現」は「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる」と説明されている。このことは、幼児期から小学校への移行期において、幼児が感じたことや考えたことを主体的に表現することを通して感性や表現する力を養うとともに、人との関わりの中で表現することを楽しみ、さらに表現する意欲を高めることが必要であるということであり、保育者養成課程における音楽表現の授業においても幼児の音楽的な表現の芽生えや育ちを支えるための音楽的な環境づくりを行うために、保育者自らの感性を高めると共に幼児の音楽的な発達に応じた音楽教材の検討が求められている。

1876年（明治9年）の東京女子師範学校附属幼稚園創設以降、幼稚園における保育内容は当初の恩物中心の形式主義から明治中期には子どもの発達や関心に基づいた遊びを中心とした保育内容への変化がみられるようになり、1911年（明治44年）7月「小学校令施行

規則」の改正以降、現場の保姆の創意により保育内容に工夫が加えられるようになった。このような子どもの興味、関心に基づいた保育内容へ変化する過程において、音楽的な視点における保姆の創意工夫はどのように行われたのであろうか。

1897年（明治30年）に京都保育会、大阪保育会、神戸保育会の三市の保育会が連合して結成された保育研究組織である京阪神聯合保育会（以下、「聯合保育会」とする。）は毎年1、2回の研究大会を開催し、各市の公立幼稚園の課題や諸問題を持ち寄り、保育の環境改善や保育実践、理論と諸問題についての討議や保姆の資格や地位向上、保姆養成機関の設置に向けて積極的に建議を行うなど、東京のフレイブル会に対抗する先進的な保育を実践する団体であった。その後、吉備保育会、名古屋市保育会が加盟し、1928年（昭和3年）には関西聯合保育会と名称変更した。

「聯合保育会」の機関誌として1898年（明治31年）7月に創刊された『京阪神保育会雑誌』（1903年より『京阪神聯合保育会雑誌』へ変更。以下、『保育会雑誌』とする。）は、毎年1、2回発行され、三市連合で行われた研究大会での演説や保育問題に関する議論、調査報告、各保育会での活動報告などが掲載されている。その内容は現場の保姆達が主体的に保育の実践に関わるなかでの課題意識の共有や情報交換、問題解決の場としての役割を果たしており、現場の保姆らによる自主的な保育改善に向けた貴重な実践記録¹⁾であった。

『保育会雑誌』には小学校に幼稚園を附設することの問題や小学校教員と幼稚園保姆との意見交換、小学校と幼稚園の連携の方法の具体案など、幼小接続に関する様々な議論も多く掲載されている²⁾。従来、幼稚

園は小学校に附設されることが多かったが、1900年（明治33年）に「小学校令」が改正され、法令に基づいて市町村が幼稚園を小学校に附設できるようになり、その後、1911年（明治44年）「小学校令施行規則」の改正により保育内容の規定の要旨が削除され、各幼稚園でカリキュラムが自由に編成されるようになった。新教育運動の影響もあり、師範学校附属小学校と同附属の幼稚園では幼小接続の取り組みがなされ³⁾、幼稚園から小学校への学びの連続性を図る試みがなされるようになった。「聯合保育会」においても、現場の保姆達の幼稚園と小学校の関わりに対する課題意識は高かったものと思われる。

「聯合保育会」の研究大会では、毎回、各保育会ごとに「遊戯」を創作し、「遊戯交換」として創作遊戯の発表を行っていた。発表された「遊戯」は「京阪神聯合保育会提出遊戯ノ（及）歌曲」として、数字譜⁴⁾による楽譜と歌詞、遊戯の方法や動作、解説が掲載されている。また、中には、「遊戯」の名称のみ、または遊び方や動作のみで、楽譜が掲載されていないものもみられる。これらの「遊戯」は京都、大阪、神戸の各保育会の保姆によって創作されたが、各地域の高等女学校の音楽教師らも作曲等の協力を行っていた⁵⁾。その他、大会では発表されていないが各保育会に所属する幼稚園や保姆によって創作された「遊戯」や唱歌も掲載されている。

本稿では、1911年（明治44年）「小学校令施行規則」改正以降、『保育会雑誌』に掲載された「遊戯」及び各保育会の幼稚園や保姆によって創作された唱歌の音楽分析を行った。先行研究において、『保育会雑誌』の内容を音楽的な側面から検討するものは、創刊号から1903年（明治36年）までの記事にみられる唱歌教育論の概要⁶⁾、明治後期に掲載された唱歌遊戯や唱歌教材の音楽分析⁷⁾などがみられる。しかし、保姆らによって保育内容に創意工夫がなされるようになったとされる大正期から昭和初期における「遊戯」について音楽的な側面から検討するものはみられない。同時期に掲載された「遊戯」や唱歌について音楽的な視点から分析することは、当時の保育者の音楽的な創意工夫の実態を明らかにするとともに、現代の保幼小接続の視座から幼児の主体的な音楽表現を援助するための方法を検討するための一助となるものと思われる。

II. 分析の方法

本稿の分析対象期間である1911年（明治44年）7月から1927年（昭和2年）までに開催された「聯合保育会」は第19回から第32回までである。このうち、第23、26、31回は開催されていないため除外した。

すべての楽譜は数字譜で掲載されており、タイトルの横に調性と拍子が表記されている。分析においては、数字譜を五線譜化した上で保幼小接続を視座とした検

討を行うために岩井正浩による『尋常小学唱歌』の音楽的な分析方法⁸⁾に依拠し、音階（構成音）、拍子、音域、小節数、リズム型、歌詞の内容について調査した。文部省から1911年（明治44年）から1914年（大正3年）にかけて発行された『尋常小学唱歌』は、国定教科書ではなかったものの、実際は全国ほとんどの小学校で採用されていたといわれている。1932年（昭和7年）に『新訂尋常小学唱歌』が発行されるまで約20年間に渡って全国の小学校での唱歌教材として歌われていた⁹⁾。

大会では発表されていないものの、各保育会や保姆によって創作され、『保育会雑誌』に掲載されている「遊戯」や唱歌についても同様の分析を行った。分析項目のうち、リズム型と歌詞についてはそれぞれの内容を以下の略記号にて示した。

1. リズム型

- A. 同定量音符の連続（四分音符もしくは八分音符の連続）
- B. 上記Aに少し変化があるもの
- C. 同じパターンの繰り返し
- D. アウフタクト
- E. ピョンコ節（2回連続）
- F. 休符をおいて始まる（アウフタクト以外）
- G. シンメトリック
- H. タ タ ターン ターン式

2. 歌詞

1. 自然・季節
2. 生活・行事
3. 君が代を祝う
4. 忠君愛国、国体・皇室賛美
5. 教訓・父母
6. 勉学・勤勉・殖産
7. 人倫・人生
8. 武勇賛美・戦争美化
9. その他

III. 大正期から昭和初期の『京阪神聯合保育会雑誌』における「遊戯」の音楽分析

大正期から昭和初期における『保育会雑誌』に掲載された「遊戯」および唱歌の音楽分析を表1に示している。項目は、開催大会回、開催（掲載）年月、提出保育会、「遊戯」の名称、調性、音階（構成音）、拍子、音域、小節数、リズム型、歌詞である。「遊戯」の名称のみ、または遊び方や動作のみで楽譜が掲載されていないものは分析項目欄を空欄で示している。また、大会での発表ではなく、各保育会所属の幼稚園や保姆によって創作されたものについては、「大会」欄に掲載された年月（大正5年2月、8月、大正6年1月、昭和2年8月）を、「提出保育会」欄に創作園名、保姆名を示している。

表 1. 大正期から昭和初期の『京阪神聯合保育会雑誌』における「遊戯」の音楽分析

大会	開催(掲載)年月	提出保育会 (創作園・保姆)	京阪神聯合保育会提出遊戯ノ (及) 歌曲	調性	音階	拍子	音域	小節数	リズム型	歌詞
第19回	大正元年6月	京都市	進めすすめ	F	全音階	2/4	c1-d2	24	A・C	9
			花摘み	F	五音音階	2/4	d1-c2	32	A・C	9
			電車及自働車	C	四七抜き音階	2/4	c1-c2	16	C・E	2
			色合せ							
第19回	大正元年6月	神戸市	盲目鬼事							
			おだんご	F	五音音階	2/4	f1-c2	18	B	2
			頭字遊び	F	四七抜き音階	4/4	f1-d2	4 (+ 前奏2)	A	9
			子供と犬	F	四七抜き音階	2/4	c1~c2	16	A	2
第20回	大正2年5月	京都市	自転車	D	七抜き音階	2/4	d1-d2	15	C・E	2
			静に静に	C	全音階	2/4	d1-h1	8 (+ 伴奏8)	A	9
			蝶々	D	全音階	2/4	d1-e2	16	E	9
			郵便屋さん	F	5音音階	2/4	g1~c2	11	E	2
第21回	大正3年11月	京都市	もみぢ	F	全音階	2/4	c1~d2	16	B	1
			飛行機	F	七抜き音階	2/4	f1~d2	18	C	2
			戦争遊	F	四七抜き音階	2/4	c1~c2	12	B・C	9
			赤十字	C	四七抜き音階	2/4	c1~c2	12	A・C	9
第21回	大正3年11月	神戸市	其時々	D	四七抜き音階	2/4	d1~h1	12	A・C	1
			飛行機	C	四七抜き音階	2/4	e1~e2	16	C・E	2
			軍艦	G	七抜き音階	2/4	d1~d2	24	C・E	2
			號外	G	四七抜き音階	2/4	d1~e2	24	B・C・E	2

大会	開催(掲載)年月	提出保育会 (創作園・保母)	京阪神聯合保育会提出遊戯ノ (及) 歌曲	調性	音階	拍子	音域	小節数	リズム型	歌詞
第22回 大正4年5月		京都市	御大典	G	七抜き音階	2/4	e1~d2	9	B	3
			花売(賣)	G	全音階	2/4	d1~e2	22	B	9
			蝶々	G	全音階	4/8	g1~d2	16	A・C	1
			置換遊び	D	全音階	2/4	d1~d2	16	A・C	9
大正5年2月 (36号)		大阪市	凱旋							
			人形	F	七抜き音階	2/4	f1~d2	16	A・C	9
			鸚鵡	G	四抜き音階	2/4	d1~d2	20	A	9
			幼稚園 幼児用 御大禮奉祝唱歌	C	四抜き音階	4/4	c1~c2	16	A	4
大正5年8月 (37号)		大阪市立御津幼稚園	應援のうた	G	四七抜き音階	2/4	d1~e2	16	A・C	2
			人形遊	C	四七抜き音階	2/4	c1~a1	16	C・E	9
大正6年1月 (38号)		大阪市保育会提出遊戯 (大阪市保育会 総集 会にて)	ねずみ	G	全音階	2/4	d1~h1	8	A	2
			鳩	F	四七抜き音階	2/4	c1~d2	12	A・C	1
			修身の	D	四七抜き音階	2/4	d1~h1	16	A	5
			手鞠歌	G	五音階	2/4	e1~h1	14	A・F	5
第24回 大正6年6月		京都市	貝拾い	F	五音階	4/4	d1~d2	12	A	1
			岡崎公園	F	七抜き音階	2/4	c1~c2	16	C・E	1
			兎狩	F	四七抜き音階	2/4	f1~d2	24	C・E	2
			猫とねずみ	G	全音階	2/4	d1~h1	8	A	2
第24回 大正6年6月		大阪市	鳩	F	四七抜き音階	2/4	c1~d2	12	A・C	1
			竹藪	D	全音階	2/4	d1~d2	16	A	1
			子供遊び	F	四七抜き音階	2/4	c1~d2	16	A	2
			お米	F	四七抜き音階	2/4	c1~d2	16	C・E	2

大会	開催(掲載)年月	提出保育会 (創作園・保母)	京阪神聯合保育会提出遊戯ノ (及) 歌曲	調性	音階	拍子	音域	小節数	リズム型	歌詞	
第25回	大正7年6月	京都市	鳩捕へ	C	全音階	2/4	c1~e2	13	C・D	1	
			お祭り	F	四七抜き音階	2/4	c1~f2	16	C・E	2	
		大阪市	お馬	C	四七抜き音階	2/4	c1~c2	16	A・C	1	
			雨	F	四抜き音階	2/4	f~d2	28 (+前奏8)	A・G	1	
第27回	大正9年11月	神戸市	六の球 (手まりの歌)	F	五音階	2/4	c1~c2	32	C・E	2	
			宿がへ	D	四抜き音階	2/4	d1~cis2	8	A	2	
			秋の蟲	F	四七抜き音階	2/4	c1-d2	12	A・D	1	
		神戸市	山の向ふ①	C	四七抜き音階	2/4	c1-d2	12	A	9	
			山の向ふ②	F	全音階	2/4	c1-d2	24	A	9	
			山の向ふ③	B	全音階	2/4	f1-f2	9	E	9	
			山の向ふ④	F	全音階	2/4	c1-d2	16	A	9	
			風車と水車	F	四七抜き音階	2/4	c1-d2	20	E	9	
			時								
		大阪市	時のおぢさん								
			羽衣								
			なかの〜小坊さん								
第28回	大正10年11月	京都市	電話遊び	D							
			行きたい								
		大阪市	兎さん								
			秋の山								
神戸市	秋の野遊										
	だるま										
	帆かけ船	G	全音階	2/4	d1-e2	8 (+伴奏10)	B・D	9			
神戸市	猫の智慧①	F	全音階	2/4	c1-d2	32	A・C	9			
	猫の智慧②	B	全音階	2/4	b-d2	16	A	9			

大会	開催(掲載)年月	提出保育会 (創作園・保母)	京阪神聯合保育会提出遊戯ノ (及) 歌曲	調性	音階	拍子	音域	小節数	リズム型	歌詞		
第29回	大正11年11月	神戸市	春が来た									
		京都市	森の狼									
			きくと遊ぶ									
		吉備	やっちゃんさん									
			むら雀									
第30回	大正12年10月	大阪市	まひねずみ									
			蝙蝠									
			鼠の平和会議歌劇の一節(鼠の閑散踊)									
		京都市	正直な樵夫									
		大阪市	雀のお手毬									
		神戸市	穂なげ									
			シャボン玉	F	全音階	4/4	c1-d2	16	C	2		
		岡山市	電車									
		第32回	大正14年10月	大阪市	影踏み							
					兎のダンス							
虫の楽隊												
団栗ころころ												
お山												
お遊び												
風にはつ葉												
昭和2年8月(50号)		京都市	自動車遊び									
			朝起きの雀									
		神戸市	兎のダンス									
			お玉じゃくし	D	全音階	2/4	d1-d2	16	C・E	9		
			海水浴	C	四七抜き音階	2/4	c1-c2	12	B	9		
大阪市立御津幼稚園	お米	F	四七抜き音階	2/4	c1-d2	16	C・E	2				
	田植	F	四七抜き音階	2/4	c1-d2	16	E	2				
		豊年踊	F	四七抜き音階	2/4	c1-f2	9(+前奏8)	C	2			

IV. おわりに

本稿では、1911年(明治44年)「小学校令施行規則」改正以降の『保育会雑誌』に掲載された「遊戯」及び各保育会の幼稚園や保姆によって創作された唱歌の音楽分析を行った。今回の分析結果は、音楽的な視点から各保育会毎の「遊戯」の特徴や時代による変化を検討する上での基礎的資料となるものであり、当時、各地の幼稚園から歓迎され、現場で唱歌教材として使用された専門家の創作による『大正幼年唱歌』や全国的に小学校で用いられていた唱歌教材『尋常小学唱歌』との比較検討においても有益な資料であると思われる。しかし、今回の分析においては各「遊戯」の創作に関わった音楽家等の関係者を調査できなかった。今後の課題として、どのような経緯のもとで「遊戯」が創作されたのか、同時期に出版された遊戯集等との突合により、その詳細を明らかにしたいと考える。

頁。堀江遙『京阪神聯合保育會雑誌』にみられる京阪神地区における明治後期の唱歌遊戯の特徴』『広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学研究紀要』XXIV 2012年、151-158頁。

- 8) 岩井正浩『増補 子どもの歌の文化史』第一書房、2003年、144-158頁。
岩井は歌詞分析において、唐澤(1956)による教科書の分類を参考にしている。唐澤富太郎『教科書の歴史—教科書と日本人の形成—(上)』創文社、1956年、325-329頁。
9) 上原一馬『日本音楽教育文化史』音楽之友社、1988年、234頁。

史料

京阪神聯合保育會編『京阪神聯合保育會雑誌』(復刻版) III・IV・V、臨川書店 1983年。

注)

- 1) 水野浩志「京阪神聯合保育会雑誌(1)一創刊当初の内容」『幼児の教育』第79巻 第5号、1980年、58-63頁。
- 2) 森岡伸枝「幼小連携の課題—明治・大正期の京阪神聯合保育会から—」『聖母女学院短期大学研究紀要』第38集、2009年、119-129頁。
- 3) 柴崎正行「保育内容とカリキュラムの変遷」『保育学講座』日本保育学会編、第1巻、東京大学出版会、2016年、155-161頁。
- 4) 数字譜とは略譜とも呼ばれ、調の主音を1とし、「ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ」を「1・2・3・4・5・6・7」の数字で表記する楽譜である。音の高低が分かりやすく、歌唱練習に効果的であるため、大正期には全国的に多くの小学校で使用されていた。
- 5) 小山みずえ「新しい遊戯法の導入と「遊戯」研究の展開—京阪神(関西)聯合保育会の活動を中心に—」『近代日本幼稚園教育実践史の研究』学術出版会、2012年、124-126頁。
- 6) 永田桂輔「京阪神保育會雑誌にみる唱歌教育の方法」『倉敷市立短期大学研究紀要』第22号、1993年、47-55頁。同「京阪神保育會雑誌にみる唱歌教育の方法(その二)」『倉敷市立短期大学研究紀要』第24号、1993年、43-52頁。同「京阪神聯合保育會雑誌にみる唱歌教育(その四)」『倉敷市立短期大学研究紀要』第26号、1996年、113-120頁。
- 7) 明治後期の記事に関して音楽的な視点から検討するものとして、以下の先行研究がある。
三村真弓「明治後期京阪神地方の幼稚園教育に見られる唱歌観—『京阪神聯合保育會雑誌』及び『京阪神幼稚園遊嬉』の検討を中心に—」『広島大学教育学部教科教育学科音楽教育学論集』IX、1997年、29-42